
アゲハ蝶

和泉紀伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アゲハ蝶

【Nコード】

N98130

【作者名】

和泉紀伊

【あらすじ】

秋本アゲハは親友で一日に三分間ヒーローを気取る男、新木との旅行の為に待ち合わせ場所に赴いた。そこで見つけたシリアルナバー付きの英文のスプレーアート。ジョン・デンバーが墜落死した年に起きた火事と新木のストリートライブの関係とは。空を飛ぶペンギンと、飛べないアゲハ蝶の物語

アゲハ蝶？

プラットフォームから見える看板は今日も変わらずテナントを募集している。秋本アゲハはそれを見るたび、今日という日は昨日の延長線でしかないのだと思った。

電車が視界を遮る。ドアが開くと旅行鞆を提げて乗り込んだ。持ってきた芸術史のコラムに書かれていたドラクロアとショパン、ジヨルジュ・サンドの関係性は興味深く、惹かれるものがある。降りる際、真夏だというのに冬服を着た女子高生とすれ違った。

新木との待ち合わせ場所に着くとスプレーアートが目に残る。

『No. 4』のシリアルナンバーと『Simple Love & Sample Peace』という英文が添えられている。どういう目的で描かれたものなのか全く理解出来ないが、センスの欠片もないような幾何学模様は描き手の混乱が壁に染み付いてしまったようにアゲハには映った。

アゲハ、と呼びかけられて振り向くと頭にタオルを巻き、薄汚れた作業着姿で新木が立っていた。解禁した胸元に鳥のデザインのネックレスが鈍く光っている。

「空港に行くのは飛行機に乗る為か？ それともメンテナンスか？」

「仕方ないだろ。棟梁がぎりぎりまで働いて行けってうるさかったんだ。とりあえずツナギはコインロッカーに預けるから、どこかで服を買わせてくれ」

先が思いやられるとアゲハは肩をすくめた。

一日に三分間、新木はヒーローを気取る。普段から彼は「三分で出来る悪事があるなら、三分で出来る人助けが必ずある」と口癖のように言っていた。

事故現場に遭遇したのは洋服を買い終えて通りを歩いていた時だ

った。クラクションにブレーキの摩擦音、鈍い衝撃音の後に甲高い悲鳴。そして、ざわめき。いつだって事故は音で溢れている。

ゴムの焼けるような嫌な臭いが辺りに立ち込める。けれど何よりもアゲハの気分を害したのは、その場にいた全員が観衆に徹していることであつた。

買い物袋を投げ出し、二人は女性に駆け寄つた。新木がタオルで頭を押さえて止血を試みる。

手が汗ばむ。アゲハは初めて目の当たりにする事故に混乱していたが、それでも救急車の手配とAEDの用意を服装に特徴のある野次馬に指示した。特徴で呼び掛けられると大衆の目もあつて無視出来なくなると何かで読んだことがあつた。

「心肺停止から三分以内に心臓マッサージをしないと生存確率は絶望的らしいな。三分、ちょうど良いじゃないか」

「救急車が来るまで七分かかることもあるんだ。それまで続けなきゃいけないんだぞ」

必死で以前習った心臓マッサージの手順を記憶の海から手繰り寄せようとするが、なかなか思い出せずにもどかしい。焦りばかりが募っていく。

アゲハの不安を余所に新木が言った。「なら、延長戦だな」

「大丈夫だって、俺たち二人なら空だって飛べるさ」

お前はすげえよ。アゲハは落ち着きを取り戻した。

「これから飛行機に乗るんだもんな」

ジョン・デンバーが墜落死した年、母親が数日ほど帰国した。少し痩せていた。

「ボランティアに行つて現地の子供たちに色々な遊びや文化を教えてもらおうと思うのよ。無償奉仕と言っても沢山のものを貰ってるんだって」

母親はよく、少女のような面持ちでアゲハに誇らしげに語ってい

た。

「いい？ 誰かの為だなんて恩着せがましいことは言わないの。どうせなら胸を張って言いなさい。『自分の為と思える誰かの為に頑張るんだ』って」

そうすると決まって祖父の平田が「自分のせがれを放っておいて何が無償奉仕だ」と口を挟み、たびたび口論となった。

頭を冷やす為、ライターを買いに行くことを口実に平田は幼いアゲハの手を引いて家を出た。

娘が海外ボランティアに参加し、家を留守にすることに憤りを覚えることがある。アゲハや義理の息子に寂しい思いをさせていることを思うと申し訳なさで一杯になるのだ。そうすると、どうしてもケンカ腰になってしまった。

おじいちゃんはお母さんが嫌いなもの？ アゲハの不安そうな顔が胸を衝く。そんなことはねえさ。平田は小さな手を強く握る。

サイレンのけたたましい音が町内に鳴り響き、踵を返すと黒煙を目印に火事現場に足を運んだ。燃えていたのは『新木』という新築の家であった。

煙草の火には困りそうもねえな。火の勢いを見てそう思った。

野次馬が口々に子供がまだ取り残されていることや、道が混んでいて消防車の到着が遅いことを告げている。隣で怯えて袖を放そうとしない孫を見て、火の中に取り残されているという子供にその姿を重ねていた。

平田はしゃがんでアゲハに目線の高さを合わせる。

「アゲハ、よく聞け。じいちゃんは今から中のガキを助けに行く」

「いやだ。おじいちゃん、死んじゃうよ」

「大丈夫だ。じいちゃんは昔、消防士だったんだ」

「前は警察官だったって言ってた」

「そういうことある」

鱗粉のような火の粉が二人の間を掠めて行く。

「じいちゃんはアゲハの前で格好付けただけなんだ。火の中に飛

び込むのはそのついでだ」

震えるアゲハの小さな身体を抱きかかえて、自身にも湧き上がる恐怖を自覚した。もし生きていたら、娘に謝ろう。精一杯強がって平田は言った。

「野菜も食うんだぞアゲハ」

「でも、おじいちゃんだってトマト残す」

「あれは観賞用だ」

孫のポケットに煙草のケースを詰め込んで立ち上がる。近くにいた野次馬の一人が持っていたバケツを奪いとり、中の水を頭から被った。濡れた前髪をかき上げると、水が滴りゃちつとは良い男に見えるもんかねとシニカルに笑う。

平静を装っていたのも束の間、腕は小刻みに震え始める。武者震いだと思いたかった。頼むからアゲハに感づかれるな。そればかりを考えた。誰かが手を握る。震えは止まったが、その安心を平田はやつとのこととで振り払う。

泣き顔を思い浮かべると躊躇ってしまうと思い、振り返ることなく燃え盛る家に駆け込んだ。

ガラスを破って窓から炎が吹き出したのは、その直後だった。

アゲハ蝶？

良いことも悪いことも新木が教えた。酒の味を覚えたのは高校生の頃だ。けれど煙草は新木が嫌っていたので、アゲハも吸わない。現代文の授業が終わり、『坊っちゃん』の文庫本を鞆にしまっている。と前の席に座る新木がなあと呼び掛けてから振り向き言った。

「坊っちゃんは上手く飛べたのかな？」

質問の意味がよくわからずアゲハは首を傾げる。

「ほら、囃し立てられた坊っちゃんが二階から飛び降りて腰を抜かしたことを親父に咎められて『この次は抜かさずに飛んで見せます』って言ってただろ」

「坊っちゃんは次も飛べなかった。赤シャツたちを制裁する前に宿屋の二階から飛ばうとしたけど、結局坊っちゃんは飛ばないんだ。それは飛べなかったんじゃないか飛べなかったんだと思う」

「と言うと？」

「その時は、誰も背中を押してくれなかったからだ」
すると新木は携帯電話を取り出し、鳥の画像をアゲハに見せた。訪ねると「オロロン鳥。空を飛べるペンギンだ」と彼は誇らしげに言った。嘘吐けよ、とあしらう。確かにその鳥はペンギンに似ている。けれどペンギンが空を飛ぶなんてナンセンスだ。

「流石にペンギンっていうのは嘘だけど、オロロン鳥は海鳥の一種で岸壁に巣を作って、ろくに飛べないうちに崖から飛び降りて巣立つんだ」

「上手く飛べないまま、か」

「いつか俺たちも飛ばなきゃいけない日が来るのかもな」

飛べそうか？ とアゲハが聞いたけれど新木は答えない。ただ鳥を象ったネックスレスをいじっていた。新木は高校を卒業すると、すぐに鳶職に就いた。

アゲハの知る限り、新木の三分間の一日一善は既に高校の時には始まっていて、廃屋に呼び出されたクラスメートが暴行を受けていると聞けば、駆け付けてきっかけ三分で片付けた。

パトカーのサイレンが聞こえて新木はアゲハに窓から飛び降りて逃げるように言った。けれど二階とはいえ見下ろすと地面までの距離は遠く感じられ、嫌な想像ばかりが頭をよぎり足がすくむ。

飛び降りることはできなかった。そのことを今でも悔いているし、恥じている。

旅行から帰って来た翌日から新木はストリートライブを始めた。ライブに付き合っているうちに彼が決まって、駅前で見たとようなシリアルナンバーと英文が添えられたスプレーアートの前で歌っていることに気付く。

よく気付いたなと新木はギターから視線を外さずに言った。それ以上、何を聞いてもライブとスプレーアートの関連性については答ええない。彼はいつも核心的なことには寡黙だった。

Almost heaven,
West Virginia
Blue Ridge Mountains,
Shenandoah River
Life is old there,
older than
the trees,
Younger than the mountains,
blowing like a breeze

コードを確かめながら弦を爪弾き、子供をあやすように新木は口ずさむ。タンクトップから伸びる、筋肉の絞られた両腕と傷だらけの指先からは想像出来ないような繊細な作業だ。その姿は妙に様に

なっていてアゲハでさえ見惚れてしまう。洋楽らしいけれど、メロディーには確かに聞き覚えがあった。

「その曲は？」

「ジョン・デンバーの『故郷に帰りたい』。いや、『カントリー・ロード』って言った方が分かりやすいな。親父が好きで、よく口ずさんでたのを聞いていたから俺も七歳の時には歌えたんだぜ」

調整しながら快活に笑う。両親は幼い頃に離婚していて、新木は父親に引き取られたと聞いている。

「ジョン・デンバーはさ、一度も行ったことがないウェストバージニアを舞台にして故郷に帰りたいだなんて歌ってるんだ」

「案外、帰るべき場所はどこにでもあるのかもな」

新木の演奏が止まる。

「なあ、アゲハ。もし『No. 1』のスプレーアートを見つけたら、教えてくれないか？」

夏の色濃い影が図書館の壁に殴り書きされた『No. 7』と『stand by say Good-bye』という文字を撫でている。

窓枠に残ったガラス片を踏まないよう慎重に平田は足をかけた。

爺さんが飛び降りる気だぞと言う声が聞こえる。わかっているならシートを広げるなり、空きのダンボールを積み上げておくなり準備を整えていても良いはずだと平田は舌打つ。

「もう少しの辛抱だからな」

濡れたシャツにくるんだ子供に言い聞かせ、踏み出そうとした時に意識が朦朧として咄嗟に後ろに倒れ込む。前のめりになって頭から落ちたのでは堪ったものではない。

倒れる直前に泣きじゃくる孫の姿を人混みの中で見つけた。泣いているその側に行つてやれないことの方がずっと怖いと思えた。フローリングの床は熱を帯びている。我ながらよく寝転んでいられたものだと思える。

今行ってやるからなという気概で立ち上がり、再び足をかけるとなるべく着地点が遠くなるように窓枠を蹴って飛び降りた。熱せられた体温がずっと下がっていく。腹筋に力が入ったのも束の間、地面が驚くほど早く近付いてくる。

気付けば横たわっていた。アゲハが心配そうに顔を覗き込んでいる。雑踏の合間に子供が左腕にひどい火傷を負っていることが聞き取れた。ちゃんと助けてやれなくて悪いな。平田の胸中は複雑だった。

「おじいちゃん焦げてる」

「焦げてるじいちゃん嫌いか？」

可愛い孫が首を横に振ってくれたのは幸いだった。サイレンの音が遠ざかっていく。

アゲハ蝶？

日中の熱が空気に残っているような蒸し暑い夜だ。駅に向かって歩いていると、微かにガスが漏れるような音がする。アゲハは辺りに注意を払う。するとニット帽を目深に被り、長袖のパーカーを来た人物が公園の壁にラッカースプレーを噴き付けていた。

『No. 9』と『Country Road Take Me Home』の文字。

アゲハに気付いて走り出した彼になんとか追い付き肩を掴む。目の前に突き出されたスプレー缶を慌てて弾き飛ばす。

ニット帽を剥ぐと長い髪が落ちて広がる。以前すれ違った少女だった。

「受験勉強がはかどらなくてさ、そうすると気を紛らわせたくて別のことをやりたくなるじゃない？ 手近な本をおもむろに手に取ってみたり、突然、部屋の掃除を初めてみたりだとか」

「それでこんなことを？」

そう、と悪びれもせず梨沢莉央は頷き、ジュースに口を付けた。ナンセンスだとアゲハは肩をすくめる。

訊ねられて名前を告げると「変な名前」だと笑われた。確かにねとアゲハは自嘲する。

「けど母親が俺にくれたものは二つしか無いんだ。名前と生きる上での心構え。それだけ」

「じゃあその名前にもちゃんとした由来があるの？」

コーヒーを一口含む。気恥ずかしくて躊躇われた。新木にさえ、まだ話したことはない。

「『天才とは蝶を追いかけて、いつの間にか山頂にのぼっている少年のことである』。だけど天才にならなくてもいい。それなら天才

にだって追いつかれない、立派に羽ばたく蝶の方がずっと良い。そう聞かされてる」

「素敵なお母さんね。うちのとは大違い」

勉強と貯金が口癖なの、と莉央。

「ところが母親は海外ボランティアで滅多に家にいることはなくて、父親は仕事だから俺はじいちゃんに育てられた」

「なんか私と似てるね。私は片親なんだけど、来月には再婚して弟も出来るのよ」

そしたら引越すのという彼女の言葉が寂しげに聞こえた。なるほど、それで『stand by say Good-bye』かとアゲハは納得する。気まづくなり、話題を変える為に新木の頼みごとを切り出した。

「ちょっと聞きたいんだけど『No. 1』のスプレーアートはどこにあるのか教えてくれない？」

「無いわよ」

意外な返答に戸惑う。莉央は写真を取り出した。背景に幼稚園の名前と飾り付けられた、平仮名で学芸会の文字が見て取れる。幼い莉央の持っている画用紙にはクレヨンで描かれた家族と思しき四人と『No. 1』の文字。

「大好きな私の家族は『No. 1』で、それを描いたこの絵が『No. 1』だから」

落ち葉が嫌でも目に付く。昨夜、莉央は十二番目のスプレーアートを描いた。

あんたがいなくなったら、さぞかし街は殺風景になることだろうよと皮肉ると、あなたの生活からもきつと華が無くなるでしょうねと返された。よく言うよとアゲハは舌を巻いた。

秋風が通り抜ける住宅地で偶然、荒木を見かけて駆け寄る。彼は青い屋根の家を見つめていた。声をかけると驚いた表情を浮かべて、

なんだアゲハかと新木は胸を撫で下ろした。

新木の顔色が心なしが悪く見えたのが気にかかる。息遣いが荒く、
気だるげで具合が悪いように見えた。

「何してるんだ？」

隣家の婦人が不審そうにこちらを見ているのに気付き、アゲハは
声をひそめて尋ねる。

具体的な返事はせず新木はぼつが悪そうにして、これから仕事だ
からと足早に去って行った。「無理するなよ」。アゲハは遠ざかる
背に呼びかけた。

あいつの背中、あんなに小さかったか。アゲハは不安を覚えた。
夜になって、二つの連絡があった。新木が足場から転落したこと
と至急、病院に検査を受けに来て欲しいとのことだった。

アゲハ蝶？

陰性と書かれた用紙を折りたたみ、案内された病室に入る。傍らの椅子に事故に遭った女性が座っていて、アゲハの顔を見ると立ち上がり深々と頭を下げて謝罪の言葉を口にする。

彼女はB型肝炎を患っていて、血に触れた新木が感染した。アゲハも同じ検査を受けさせられ、インターフェロン療法の説明も受けたが肝硬変や肝臓といった言葉が頭の中を占めてしまい、よく覚えていない。

警告があったかも知れないが、たまたま旅行と重なったことで発病するまで気付くことが出来なかった。

「上手くいけば、日常生活に支障が出ないくらいには回復するみたいだし何とかなるだろ」

「そういう問題じゃねえだろ」

楽天的な新木の態度にアゲハは怒鳴り声をあげた。

「支障がないって言っても、いつまた発症するかわからない。肝臓になれば最悪死ぬんだぞ？ 治らねえんだよ。わかってんのかよ」

「お前に聞いて欲しいことがある」

「遺言なんてふざけたこと言ってみろ。はっ倒すからな」

もう倒れてるよ、と新木が苦笑する。

「ジョン・デンバーが墜落死した年の、うちの火事のことだ」

アゲハは閉口した。あの時のことは鮮明に覚えていた。火の海に飛び込んでいく祖父の背中を見て、ひどく不安に駆られたことも。

「三分で出来る人助けがあるんだから、三分で出来る悪事もあるんだよな」

取り返しの付かないことをした。そう思うと腹部がそわそわとして落ち着かない。

父親の吸いかけの煙草に手を伸ばしたが為に今、目の前で家が燃

えている。咎められているのは何も知らない父親だった。涙も出ず、幼い新木は呆然と立ち尽くしていた。

燃え盛る家に飛び込んだ老人は一向に出てくる気配がない。もしも死者が出ることがあれば、それは全て自分の所為だ。これから受けるであろう仕打ちや行く末の心配ばかりしている自身が情けなかった。けれど、どうすることも出来なかった。

二枚、三枚とガラスが割れていく。目を背けたくなるような光景だった。どうせなら中に取り残されたのが自分ならどれほど良かったことか。

二階の寝室の窓に見えた老人の姿が火の中に消えた時、新木は息を飲んだ。希望が潰えたかに思えた。しかし再び立ち上がった老人は窓枠によじ登る。

そして彼は飛び降りた。ジョン・デンバーは墜落死した。老人は生きていた

お前の爺さんには感謝している。そう言って新木は続けた。「妹を助けてもらったんだからな」

「こうして弱ってみると色んなことを考えるんだ。自分が誰に傍にいて欲しいかとかさ。そしたら、やっぱり家族だよなって。でも、あの家族を滅茶苦茶にしたのは俺なんだ」

俺はヒーローなんかじゃない。謝りたい。せめて妹に一言謝りたい。新木の痛切な願いを聞いてアゲハは思い立つ。自分の為と思える誰かの為に。今がその時なんだと。

「お前と待ち合わせた日に偶然見かけたんだ。大人びていたけど面影があつてさ、すぐわかったんだ。だけど声をかけられなくて」

「だから気付いて欲しくて始めたんだろストリートライブ」

ああ、と新木。

「その女の子は左腕の火傷の痕を気にしてどんなに暑くても長袖の服を着ていて、今はお前が昨日見ていた家に住んでる。名前は、莉央」

何で知ってんだよと新木は目を丸くする。お前だって肝心なことは言わないじゃないか。アゲハは手を差し出した。

「お前の付けてる鳥のネックレス貸してくれよ」

手渡されたそれを付けて握りしめる。翼のデザインが手のひらに食い込んだ。勇気はきつと、痛みを伴うものなのだと感じた。

「いつか言ったよな。二人なら空だって飛べるって。次は上手く飛んで見せるから」

アゲハはアルミのサッシに足をかける。カーテンがそよぐ。穏やかな風を受けて目を閉じた。以前はすごく怖かった。それは今も変わらない。けれど、空飛ぶペンギンが一緒なら、飛べないアゲハ蝶だって羽ばたける。恐れることはない。それよりもずっと怖いことを知っている。

目を開けて、振り返る。

「俺は、お前の前で格好付けたいだけなんだ」

新木はきつと、わかっていてアゲハを止めないのだろう。全ての空を飛ぶ生き物は自分の翼を信じているだなんて、ナンセンスかな。

「飛び降りるのは、そのついでだ」

アゲハは微笑み、思い切って窓枠を蹴った。女性の短い悲鳴が遠ざかる。

着地と同時に指先から頭にかけて電流が走ったように痺れた。心臓の高鳴りは依然として続いていた。

二階を見上げると新木が窓枠に立っていた。アゲハは両の手を伸ばしていく。

「俺がドラクロアになるよ。ショパンの曲にもう一度ジョルジュ・サンドが耳を傾けられるように」

だから待ってろ、必ず連れて来るから。足の痺れは消えていた。もう大丈夫だ。アゲハは走り出した。

ベッドに横になると新木はドラクロアについて女性に訊ねた。返答を期待してはいなかったが、彼女は知っていたらしく話してくれた。

「ドラクロアは芸術家で、ピアノを弾く友人のショパンと演奏に聞き入るその恋人ジョルジュ・サンドを絵描きました。しかしショパンとジョルジュ・サンドの交際は破局してしまい、絵はドラクロアの死後に分割されてそれぞれ別の美術館に収められた。それはまるで二人の決別を象徴するかのように」

聞き終えて新木は改めて火事のことを思い返した。先程は気恥ずかしくて躊躇われた、アゲハにも話さなかったことだ。確かに妹を救い出し、二階から飛び降りた平田はヒーローだった。けれど、新木の印象に残っているのは平田が飛び降りた時、誰よりも早く駆け出したアゲハの姿だった。少しでも祖父の近くを目指して、転んでも歯を食いしばってすぐに立ち上がる。無理だとわかっていても、その小さな身体で落ちてくる祖父を受け止めようと精一杯、手を伸ばす。

下から新木に向けて両手を伸ばしている様が、あの時のことを彷彿とさせた。

「あいつは相変わらず、格好良いよ」

昼下がりの空を鳥たちが、街に向けて飛んでいく。

アゲハ蝶？

家はおぬけの空だった。庭に回り、リビングを覗いたけれど人はおろか家具さえ見当たらない。引越すという彼女の言葉がよみがある。よりにもよって今日かよ。どうしたらいいかわからず、途方に暮れて座り込んでいると隣から女性が垣根越しに声をかけてきた。「四番目のスプレーアートを覚えてるかい？」

虚をつかれたが恐る恐る『Simple Love & Simple Peace』と答える。

「あんたが莉央ちゃんが言ってた子だね。なかなか男前じゃないか」女性は満足げに笑い、アゲハに紙のようなものを差し出す。受け取って見ると、以前、見せられた写真だった。裏には『世界はシンブルな答えを求めている』と書かれていた。

「二時まで初めて会った公園で待ってるって。大事な写真なんだろう？　すぐに返しに行つてあげなさい」

すっかりするんだよという女性の言葉がアゲハの背中を押す。

「延長戦だ」

「お母さんがくれた生き方には、女の子を待たせないことは含まれていなかったのね」

「俺はあんたの兄さんがどこにいるか知ってる。頼むから会つてやつてほしい」

「そういう嘘は嫌い。それに、私が言いたいのはそういうことじゃなくてさ」

「新木はあんたに会いたがつてるんだ」

「仮にそうだとしても私が会いたくないって言つたらどうするの」莉央が袖をめくる。生々しい火傷の痕が腕に張り付くように残っている。

「これの所為で着る服は限られてくるし、海には行けないし、本当

に迷惑なの」

わからないでしょうけどね。激昂するわけではなく、淡々と言う。

「だから、あいつは謝りたいって言ってた。ずっと後悔してて、罪滅ぼしをするみたいに新木は人助けをするんだ。それで今は病院のベッドの上であんたを待ってる」

「私行かないから」

「あんただって新木に会いたいんだろ。あいつがスプレーアートの前で歌ってるのに気付いてた筈だ。だって九番目の、『Country Road Take Me Home』はジョン・デンバーの『故郷に帰りたい』の一節じゃないか」

帰るべき場所はどこにでもある。ただ、帰るきっかけが見つからないだけだ。

今日という日は昨日の延長線でしかない。変わり映えのない日々はいたずらに過ぎて、また夏が来た。

ストリートに立つのをやめた新木は、以前と変わらず鳶職に勤しんでいる。莉央の足跡であるスプレーアートは綺麗に街から消えてしまい、何もかもが元通りになった。そんなものだとは割り切っていたが、やはり殺風景になったと寂しく思う。

鳥を象ったネックスレスをいじりながら、階段を上る。

駅のプラットフォームに立つとアゲハは見慣れた筈の看板に目を奪われた。昨日までテナントを募集してたくせにな。自然と笑みが浮かぶ。それは十三番目のスプレーアートだった。

看板に大きく描かれた、今にも飛び立とうとするアゲハ蝶の絵と『A Country Road Led Here』の文字。そして『No. 2 + 11』のシリアルナンバー。

世界はシンプルな答えを求めている。どう応えるべきか考えながら、やって来た電車に乗り込む。

おかえり。アゲハは小さく呟いた。

【了】

最後まで読んでくださった方がいたら、ありがとうございます
途中で投げ出した方がいたら、すみません俺の力不足です
最初から読んでいない方がいたら、次も頑張ります故に次の次からは読んでやって下さい

拙い文章ですが、『アゲハ蝶』はこれでお終いです
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9813o/>

アゲハ蝶

2011年7月3日03時37分発行